

## 研究助成実施報告書

助成実施年度	2020 年度
研究課題（タイトル）	15・16 世紀フランスにおける木造町家に関する歴史考古学的研究とその保存・活用のための地方自治体の政策
研究者名※	堀越 宏一
所属組織※	早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授
研究種別	研究助成
研究分野	都市建築史、都市と文化
助成金額	100 万円
発表論文等	

※研究者名、所属組織は申請当時の名称となります。

( ) は、報告書提出時所属先。

## 大林財団2020年度研究助成実施報告書

所属機関名 早稲田大学教育・総合科学学術院

申請者氏名 堀越 宏一

研究課題	15・16世紀フランスにおける木造町家に関する歴史考古学的研究とその保存・活用のための地方自治体の政策
<p>(概要) ※最大10行まで</p> <p>15～16世紀のハーフティンバー式木造町家について、「宝珠状曲線装飾」と「十字窓」という特徴を手掛かりに、ノルマンディー・ブルターニュ両地方に現存する木造町家の所在を把握し、その分布、歴史的特徴、壁面の形状と構成、内部空間の構造を分析することを目指した。同時に、歴史の木造町家建築の保存と公開に関して、現地の自治体当局等による施策の調査も計画した。</p> <p>コロナ流行により現地調査が行えず、文献とデータベースによる調査に留まった。成果としては、中世町家建築の3タイプとして、石造、木造、その混合型を区別し、その特徴を考察した。さらに対象地方各地に残されている中近世町家の新たな事例発見に努めた。今後は、木造町家に関する一次史料の収集に努める必要がある。</p>	

1. 研究の目的	(注) 必要なページ数をご使用ください。
<p>現在まで日本で語られてきた中世ヨーロッパの建築物は、ロマネスク式からゴシック式に至る教会・修道院建築か、王侯貴族の住む城や館だった。これに対して、一般民衆の住居である町家や農家に関心が向けられることはほとんどなかった。しかし、近年のフランスでは、こうした古民家建築に関心が集まるようになり、ミシュランの地方ガイドブックでも、現存する古民家についての解説が見られるようになってきている。</p> <p>私は、ここ10年来、フランス中南部のサンチャゴ巡礼路沿いの諸都市に集中的に残されている石造の中世町家を調査するなかで、同時に幾つものハーフティンバーhalf-timber式木造町家(木骨真壁工法による)を発見してきた。そして、必然的に両者を比較研究することが可能であると着想するようになった。このような状況下で、中近世フランスのハーフティンバー式木造町家を研究することには、以下のような二つの目的があると考えた。</p> <p>第一に、このハーフティンバー式の木造町家建物は、中世から20世紀初めにいたるまで、ヨーロッパ各地で建てられてきたうえに、建築様式に変化が乏しいために、個々の建物の建築年代が確定しにくいという問題点をもっている。しかし、これまでの調査により、15世紀後半から16世紀にかけてのハーフティンバー様式木造町家の窓には、同時期の石造建物の窓に見られる特徴である、①窓枠上辺の宝珠のような曲線装飾と、②十字窓が用いられていることを発見してきた。1400年以前にさかのぼる木造家屋の現存例はないので、この「宝珠状曲線装飾」と「十字窓」を手掛かりに、現存する最古の木造町家である15～16世紀のハーフティンバー様式の町家群の所在を把握し、その壁面構成や内部空間の構造と機能を調査することができると予想された。このような仮説を、フランスのノルマ</p>	

ンディー地方とブルターニュ地方に現存する木造町家について実証し、日本だけでなく、フランスでの従来の中世建築史研究上の空白を埋めることが第一の目的である。

さらに、現在のフランスでは、現存するハーフティンバー式木造町家に対する関心が高まり、これを歴史文化遺産として積極的に保存し、研究すると同時に、観光資源として活用しようとする動きが各地で出てきている。そのような動向に関して、現地の自治体当局と地方自治体の博物館、ならびに文化省文化遺産調査局に取材して、歴史的町家の保存と公開の両立の実例を明らかにすることは、日本における同様なケースの参考とすることにつながる事が予想される。これが、この研究の第二の目的であった。

## 2. 研究の経過

(注) 必要なページ数をご使用ください。

Covid-19 流行のため、現地における町家と一次史料の調査、現地の自治体当局と博物館などに関する現地調査をまったく行うことができなかった。その結果、具体的な研究作業としては、二次文献とインターネットから得られる情報を検討することに終始せざるを得なかった。

## 3. 研究の成果

(注) 必要なページ数をご使用ください。

そのような作業の結果として得られた知見は、以下のとおりである。当初計画していたハーフティンバー式木造町家についてだけでなく、石造の町家建築との比較を行った点は、当初の計画には含まれない内容である。

### 1. 中世町家建築の3タイプ

都市内に建てられて、商人や手工業者の店舗兼住居となった町家については、残存例も多い。平屋が普通である農家と異なり、少なくとも2~3階建て、4~5階建ても珍しくない一方、間口が数~10mほどと狭く、奥行きが深い小型の建物が多いのは、都市囲壁内に十分な敷地がないからである。

建築方法には、大別して石造と木造の2種類とその混合型がある。

第一のタイプは、建物全体が石造である場合で、1階開口部をゴシック式尖頭アーチや半円ないし偏円のアーチで支え、そこに店台を据えて、1階奥のアトリエで作られた商品などを売買した。居住部分である2階には、店台の横の入り口から入り、階段を上がると2部屋程度の空間が広がるというのが通常である。2階以上の階には、通り側に、教会建築のトリフォリウムのように、横に連続する長い小型窓が設けられていることがあり、採光や通風を確保すると同時に、通りから見た際の装飾ともなっていた。

第二のタイプの町家は、建物全体がハーフティンバー式の木造建築である。これは、木造の柱と梁から成る骨組みの間を泥、石膏、レンガなどでふさいで建てられていた。建物の構造としては、1階の戸口、店舗開口部、窓などの上辺が、石造アーチではなく、水平の太い木製梁によって支えられている点が石造町家との違いで、これは、2階以上が、重量のある石造ではないためである。店台が置かれる1階開口部も四角くなり、その横に戸口があると、開口部全体が鉤状になることも、石造町家との違いである。

両者の混合型としては、1階部分は石造の柱で支えられ、上部階がハーフティンバー式木造という場合がある。1階部分を石造にすることで、湿気によって木材が腐るのを避ける目的が重要だったと思われる。

そこでは、石造建築というローマ的要素と木造建築というゲルマン的要素（ただし、後者は、そもそも都市文明とは無縁だった）の融合が見られるという E. ヴィオレ・ル・デュックの名高い仮説もあるが、それほどに込み入った歴史的背景はなさそうに思われる。地域ごとに入手できる建築資材や当事者の経済力の違いに応じて、石造か木造か混合型かが、適宜使い分けられたのだろう。

## 2. ハーフティンバー式の木造ないし半木造の都市家屋の特徴

中世の石造町家が残されている都市ははるかに少なく、その代表は、ヴェネチアと名高い修道院の門前町クリュニーである。これに対して、ハーフティンバー式の木造ないし半木造の都市家屋は、北フランス（ノルマンディー、ブルターニュ、アルザスなど）、イングランド、ドイツなど広範囲に今でも多数残されている。パリなどもかつてはハーフティンバー式木造町家が立ち並んでいたが、火災に弱いため、16 世以降にはその新規建設が禁止された。19 世紀以降の近代化もあり、現在では数軒しか残されていない。

このようなハーフティンバー式の木造ないし半木造の都市家屋の建築年代を推定するために、15 世紀後半から 16 世紀にかけての石造建物の窓に特徴な①窓枠上辺の宝珠のような曲線装飾と、②十字窓という 2 要素をハーフティンバー様式木造町家の窓にも見出そうとしたのである。

結論から言えば、これらの特徴のうち、②十字窓は比較的多くの建物に残されている一方、①宝珠状曲線装飾の事例はさほど多くはないことが確認できた。しかし、特定の都市にける悉皆調査を行うことができなかつたため、個別都市ごとの散発的な事例の発見と確認に留まらざるを得なかつた。

そのようななかで、新たに木造町家が多く残されている小都市として、オルベック Orbec（ノルマンディー地方、カルヴァドス県）があることを発見した。全体としては、ノルマンディーとブルターニュ両地方の各地で、これらの特徴を備えた木造町家が残されていることを改めて確認した。

## 4. 今後の課題

（注）必要なページ数をご使用ください。

実現できなかった現地調査と一次史料の収集を実施し、15～16 世紀の木造町家の地理的分布、歴史的特徴と時代背景、壁面の形状と構成、内部空間の構造と機能を解明して、この建物類型を中近世ヨーロッパ建築史上に位置づけなければならない。

また、今後、フランス各地の地方自治体レベルで、中世町家全体の積極的な保存と活用が追求されることが予想される。そのような動向にも注目していく必要がある。